

【D年】聖霊降臨節第6主日(2024年6月23日)

【旧約聖書日課】ヨナ書 (3章6~10節) 4章1~11節

3 ⁶このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がって王衣を脱ぎ捨て、粗布をまとって灰の上に座し、⁷王と大臣たちの名によって布告を出し、ニネベに断食を命じた。

「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ食物を口にすることは出来ない。食べること、水を飲むことも禁ずる。⁸人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのおの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。⁹そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。」

¹⁰神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくだすのをやめられた。

4 ¹ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。²彼は、主に訴えた。「ああ、主よ、わたしがまだ国にいましたとき、言ったとおりではありませんか。だから、わたしは先にタルシシュに向かって逃げたのです。わたしには、こうなることが分かっていました。あなたは、恵みと憐れみの神であり、忍耐深く、慈しみに富み、災いをくだそうとしても思い直される方です。³主よどうか今、わたしの命を取ってください。生きているよりも死ぬ方がましです。」

⁴主は言われた。

「お前は怒るが、それは正しいことか。」⁵そこで、ヨナは都を出て東の方に座り込んだ。そして、そこに小屋を建て、日射しを避けてその中に座り、都に何が起こるかを見届けようとした。

⁶すると、主なる神は彼の苦痛を救うため、とうごまの木に命じて芽を出させられた。とうごまの木は伸びてヨナよりも丈が高くなり、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消え、このとうごまの木を大いに喜んだ。⁷ところが翌日の明け方、神は虫に命じて木に登らせ、とうごまの木を食い荒らさせられたので木は枯れてしまった。⁸日が昇ると、神は今度は焼けつくような東風に吹きつけるよう命じられた。太陽もヨナの頭上に照りつけたので、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言った。

「生きているよりも、死ぬ方がましです。」

⁹神はヨナに言われた。

「お前はとうごまの木のことでは怒るが、それは正しいことか。」

彼は言った。

「もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。」

¹⁰すると、主はこう言われた。

「お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。¹¹それならば、どうしてわたしが、この大なる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。」

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 2章11~22節

¹¹だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前には肉によれば異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。¹²また、そのころは、キリストとかかわりなく、イスラエルの民に属さず、約束を含む契約と関係なく、

この世の中で希望を持たず、神を知らずに生きていました。¹³しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエスにおいて、キリストの血によって近い者となったのです。

¹⁴実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、¹⁵規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、¹⁶十字架を通して、両者をつの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。¹⁷キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。¹⁸それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。¹⁹従って、あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、²⁰使徒や預言者という土台の上に建てられています。そのかなめ石はキリスト・イエス御自身であり、²¹キリストにおいて、この建物全体は組み合わせられて成長し、主における聖なる神殿となります。²²キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 4章27~42節

²⁷ちょうどそのとき、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何が御用ですか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。²⁸女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。²⁹「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」³⁰人々は町を出て、イエスのもとへやって来た。

³¹その間に、弟子たちが「ラビ、食事をどうぞ」と勧めると、³²イエスは、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。³³弟子たちは、「だれかが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。³⁴イエスは言われた。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。³⁵あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているのではないが、わたしは言っておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。既に、³⁶刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。³⁷そこで、『一人が種を蒔き、別の人が刈り入れる』ということわざのとおりになる。³⁸あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」

³⁹さて、その町の多くのサマリア人は、「この方が、わたしの行ったことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。⁴⁰そこで、このサマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところにとどまるように頼んだ。イエスは、二日間そこに滞在された。⁴¹そして、更に多くの人々が、イエスの言葉を聞いて信じた。⁴²彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。わたしたちは自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからです。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨナ書 3章6節～4章11節

3⁶このことがニネベの王に伝えられると、王は王座から立ち上がり、王衣を脱ぎ、粗布を身にまとい、灰の上に座った。7王はニネベに王と大臣たちによる布告を出した。「人も家畜も、牛、羊に至るまで、何一つ口にしてはならない。食べることも、水を飲むこともしてはならない。8人も家畜も粗布を身にまとい、ひたすら神に向かって叫び求めなさい。おのおの悪の道とその手の暴虐から離れなさい。9そうすれば、神は思い直され、その燃える怒りを収めて、我々は滅びを免れるかもしれない。」

10神は、人々が悪の道を離れたことを御覧になり、彼らに下すと告げていた災いを思い直され、そうされなかった。

4¹このためヨナは非常に不愉快になり、怒って、2主に訴えた。「ああ、主よ、これは私がまだ国にいたときに言っていたことではありませんか。ですから、私は先にタルシシュに向けて逃亡したのです。あなたが恵みに満ち、憐れみ深い神であり、怒るに遅く、慈しみに富み、災いを下そうとしても思い直される方であることを私は知っていたのです。3主よ、どうか今、私の命を取り去ってください。生きているよりも死んだほうがましです。」4しかし、主は言われた。「あなたは怒っているが、それは正しいことか。」5すると、ヨナは都を出てその東にとどまり、そこに小屋を作り、日射しを避けてその中に座り、都に何が起るかを見届けようとした。

6神である主がとうごまを備えた。それはヨナを覆うまでに伸び、頭の上に陰をつくったので、ヨナの不満は消えた。ヨナは喜び、とうごまがすっかり気に入った。7ところが翌日の明け方、神は一匹の虫に命じてとうごまをかませたので、とうごまは枯れてしまった。8日が昇ると、神は東風に命じて熱風を吹きつけさせた。また、太陽がヨナの頭上に照りつけたので、彼はすっかり弱ってしまい、死を願って言った。「生きているより死んだほうがましです。」

9神はヨナに言われた。「あなたはとうごまのことで怒るが、それは正しいことか。」ヨナは言った。「もちろんです。怒りのあまり死にそうです。」10主は言われた。「あなたは自分で労することも育てることもせず、ただ一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまをさえ惜んでいる。11それならば、どうして私が、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、右も左もわきまえない十二万人以上の人間と、おびただしい数の家畜がいるのだから。」

エフェソの信徒への手紙 2章11～22節

11だから、心に留めておきなさい。あなたがたは以前は肉において異邦人であり、いわゆる手による割礼を身に受けている人々からは、割礼のない者と呼ばれていました。12その時、あなたがたはキリストなしに生き、イスラエルの国籍とは無縁で、約束の契約についてはよそ者で、世にあって希望を持たず、神もなく生きていました。13しかし、以前はそのように遠く離れていたあなたがたは、今、キリスト・イエスにあって、キリストの血によって近い者となりました。

14キリストは、わたしたちの平和であり、二つのものを一つにし、ご自分の肉によって敵意という隔ての壁を取り壊し、15数々の規則から成る戒めの律法を無効とされました。こうしてキリストは、ご自分において二つのものを一人の新しい人に造り変えて、平和をもたらしてくださいました。16十字架を通して二つのものを一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼしてくださいました。17キリストは来られ、遠く離れているあなたがたにも、また近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせてくださいました。18このキリストによって、私たち両方の者が一つの霊にあって、御父に近づくことができるのです。19ですから、あなたがたは、もはやよそ者でも寄留者でもなく、聖なる者たちと同じ民であり、神の家族の一員です。20あなたがたは使徒や預言者から成る土台の上に、建てられています。その隅の親石がキリスト・イエスご自身であり、21キリストにあって、この建物全体は組み合わされて拡張し、主の聖なる神殿となります。22キリストにあって、あなたがたも共に建てられ、霊における神の住まいとなるのです。

ヨハネによる福音書 4章27～42節

27その時、弟子たちが帰って来て、イエスが女の人と話をしておられるのに驚いた。しかし、「何を求めますか」とか、「何をこの人と話しておられるのですか」と言う者はいなかった。28女は、水がめをそこに置いて町に行き、人々に言った。29「さあ、見に来てください。私がしたことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません。」30人々は町を出て、イエスのもとへ向かった。

31その間に、弟子たちが「先生、召し上がってください」と勧めると、32イエスは、「私には、あなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。33弟子たちは、「誰かが食べ物を持って来たのだろうか」と互いに言った。34イエスは言われた。「私の食べ物とは、私をお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。35-36あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月ある』と言っているではないか。しかし、私は言っておく。目を上げて畑を見るがよい。すでに色づいて刈り入れを待っている。刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。こうして、蒔く人も刈る人も共に喜びなのである。37『一人が蒔き、一人が刈り入れる』ということわざのとおりになる。38私は、あなたがたを遣わして、あなたがたが自分で労苦しなかったものを刈り取らせた。ほかの人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」

39さて、町の多くのサマリア人は、「あの方は、わたしのしたことをすべて言い当てました」と証言した女の言葉によって、イエスを信じた。40そこで、サマリア人たちはイエスのもとにやって来て、自分たちのところに滞在して下さるよう願った。イエスは、二日間そこに滞在された。41そして、さらに多くの人が、イエスの言葉を聞いて信じた。42彼らは女に言った。「わたしたちが信じるのは、もうあなたが話してくれたからではない。自分で聞いて、この方が本当に世の救い主であると分かったからである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・6月23日「聖霊降臨節第6主日」の日課主題は「異邦人の救い」。

・旧約聖書日課は、「ヨナ書」から、悔い改めたニネベに対するヨナの態度と神の御心を物語る終章。使徒書日課は、「エフェソの信徒への手紙」から、キリストのもたらされた「平和」について述べる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「サマリアの女」の説話物語の後半部。

旧約日課(ヨナ3～4章より)

・「ヨナ書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第四卷「十二小預言者」の5番目に置かれた預言文書であるが、他の預言文書で大半を占める預言句集は含まれず、「預言者」の活動を描く説話物語のみで構成されている。預言文書で通常付されている標題も置かれていないが、冒頭の句にあるとおり、「アマタイの子ヨナ」がこの説話物語の主人公として設定されている。他方で、「アマタイの子ヨナ」は、「列王記」下14:25に取り上げられる「預言者、アマタイの子ヨナ」を指していることが確実で、本預言文書は、歴史上の人物「アマタイの子ヨナ」にまつわる伝承物語を預言文書として編集し、編入したものと考えられる。

・「列王記」によれば、「アマタイの子ヨナ」は、前8世紀中盤、北王国イスラエル・イエフ王朝で40年を超えて統治したヤロブアム王(在位=前786～746年頃)に仕えた宮廷預言者で、「ガト・ヘフェル出身」、つまり北王国の北部、ガリラヤ湖に近い地に拠点を持つ者(地方聖所の祭司または豪族?)として描かれている。ヤロブアム王時代の北王国でサマリア王権を支える国家聖所としての地位を得ていたのは「ベテル」であったと推認され(アモス7:10～17など参照)、サマリアの宮廷で「預言者」の地位を占めたのも「ベテルの祭司」であった可能性が高いと考えられるが、「アマタイの子ヨナ」はそれとは異なる出自の「預言者」としてサマリア宮廷に仕えていた者として伝えられていることになる。「列王記」は、この「ヨナ」が北王国ヤロブアム王の拡張政策を支持・推進した「宮廷預言者」であったと伝える。このような「ヨナ」像が、「ヨナ書」の「ヨナ」像の前提になっているものと考えられる。

・この「ヨナ」の時代(ヤロブアム王の時代)は、オリエントの覇者アッシリアの新時代を開いたティグラト・ピレセル王(=通称「プル」、在位=前745～727年頃)の登場前で、同国の勢いは低迷していた。しかし、ヤロブアム王と入れ替わるようにして登場したティグラト・ピレセル王、さらに一代挟んで続くサルゴン王(在位=前722～705年頃)によって、北王国は滅ぼされていく。旧約正典は、北王国王権に対して一貫して批判的な立場を取っており、「ヨナ書」が描くニネベの王(=アッシリア王)の悔い改めは、アッシリアのイスラエル侵攻を神の派兵とみなす思想と結びつき得る。

使徒書日課(エフェソ2章)

・「エフェソの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の5番目に置かれた書簡文書。使徒パウロがエフェソの教会共同体に宛てた書簡であるが、冒頭挨拶や末尾挨拶にエフェソに固有の事情に触れる記述が無く、書簡執筆背景をうかがい知る情報に欠ける。「使徒言行録」は、パウロがシリア・アンティオキア教会のバルナバ宣教団から離れて独自の宣教団を組織し、活動した時期にはエフェソを含むアジア州での活動を制限されていたが(使16:6、18:19～21)、その後、エフェソに二年以上滞在して活動拠点としていたこと(同19:1～10)、さらに、エフェソから距離を取らなければならない事情が生じたこと(同20:1、20:16)を伝えている。当時、エフェソは、ローマ国内でローマ、アレクサンドリア、シリア・アンティオキアに次ぐ大都市で、古典時代のギリシア文化を破壊されずに継承してきたアテネと並ぶ中心地であった。後年の古代教会では、上記三都市およびエルサレムと並んで「五大総主教座」の一つと目され、教会伝承では、その最初の指導者は「使徒ヨハネ」であったとされている。パウロが、このエフェソ(を中心としたアジア州地域)の教会共同体の指導的地位を巡る主導権争いに巻き込まれていた可能性は大いに考えられる。このようなことを考慮すると、本書簡は、「教会指導者パウロ」が「エフェソの教会共同体」に対して示した「教導的文書」としての性格を有したものであったとみなすこともできるかもしれない。

・日課箇所中で、「肉(サルクス)」および「霊(プネウマ)」の用語が各2例、用いられている。この両語は、「パウロ書簡集」で対義語としてセットで用いられる例が多くあり、その場合、「肉」は「地上的帰属性」や「人間性」を示す概念として、他方で「霊」は「天的帰属性」や「神性」を示す概念として用いられるのが通例であり、多くの場合「肉」を「霊」に劣るものとみなす価値判断が伴う。日課箇所での用例にも、それぞれ「地上的帰属性」や「天的帰属性」を示す概念性が見られるが、「肉」の罪性を殊更に示して避けるべき事柄とするような価値判断はみられない。すなわち、11節「肉」は、「異邦人」としての出自を指しての用法であり、14節「肉」は、イエス・キリストの「人」として生まれた事実を指しての用法である。パウロは、本書簡で「分断されてきた者たちの和解と一致」を福音理解の主軸に据えることを意図しており、日課箇所も、そのような主旨で展開されている。このような理解を徹底することを意図して構成される本書簡で、パウロは、他書簡では二項対立的概念とも解されるような「肉」と「霊」に関しても、両者の一致を見ようとしているのかもしれない。

・日課箇所で展開される「分断されてきた者たちの一致」は、「聖なる民」や「神の家族」、また「使徒や預言者という土台」という、「聖書」に根差した表象概念と「建物」にたとえられる組織性によって示される教会共同体によって現実化したものとして提示されている。

福音書日課(ヨハネ 4 章より)

・日課箇所は、前週福音書日課に続く箇所、「サマリアの女」の説話物語後半部。前半部の主イエスと女の対話編を受ける形で、弟子たちの反応、女の行動、さらに女から主イエスのことを聞いたサマリアの人々の反応が描かれている。

・29 節「さあ、見に来てください」の直訳は「さあ、あなたがたは見なさい」。「見なさい」は、「ヨハネ福音書」で繰り返し現れる呼びかけの言葉で、弟子の召命場面(1 章)などで多用されている。

・29 節「メシア」の原語は「キリスト」。前段の主イエスと女の対話の中でも、「メシア」＝「キリスト」への言及があった(25 節「キリストと呼ばれるメシアが来られる」)。25 節の訳(新共同訳)は、「キリスト」を「キリスト」、「メシアス」を「メシア」とそれぞれ音訳している。初期教会では早い段階で、ギリシア語「キリスト」が主イエスに固有の呼称として認識されるようになっていたと考えられる(「パウロ書簡集」の用法など参照)。この呼称が、旧約に基づくヘブライ語「メシア」の訳語であることを明示することによって、当時のユダヤ人社会で認知されていた「メシア」観に基づいて「キリスト」を位置づけようとしているのかもしれない。

・42 節「救い主」の原語は、ギリシア語「ソータール」。

来週の誕生日 (6 月 23 日～30 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-355「主をほめよ わが心」(= I 76 歌詞)は、19-20 世紀英国の医師ブリッジズの作詞とされているが、原詞は英語ジュネーブ詩編歌集に収められたウィリアム・キース作の詩編 104 のパラフレーズ。曲は、J.M.ハイドン。

・21-416「神の民は」(= II-145「かみのたみは」)は、オランダの讃美歌作家オースターハウスの作詞。彼は、元カトリック司祭だったが離脱して活動が続いている。この讃美歌は、エキュメニカル聖歌集で発表された後、WCC 編『今日の新しい讃美歌』(1966 年)に再録、英語版から邦訳が作られた。

・21-400「たとえ塔は崩れ」(= II 45 番「いしづえゆるがぬ」)は、19 世紀デンマークの著名な讃美歌作家グルントヴィ作の歌詞に、ノルウェーの音楽家リンデマンが作曲。「讃美歌第二編」からは大きく改訳されている。

21-355「主をほめよ わが心」**My Soul, Praise the Lord!**

1. My soul, praise the Lord! / O God, Thou art great: / In fathomless works / Thyself Thou dost hide. / Before Thy dark wisdom / And power uncreate, / Man's mind, that dare praise Thee, / In fear must abide.
2. This earth where we dwell, / That journeys in space, / With air as a robe / Thou wrappest around: / Her countries she turneth / To greet the sun's face, / Then plungeth to slumber / In darkness profound.

3. All seemeth so sure, / Yet nought doth remain: / Unending their change / Obey's Thy decree. / The valleys of ocean / Stand up a dry plain, / Thou whelme'st the mountains / Beneath the deep sea.
4. The clouds gather rain / And melt o'er the land, / Then back to the sun / Are drawn by His shine: / Whereby the corn springeth / Through toil of man's hand, / And vineyards that gladden / His heart with good wine.
5. All beasts of the field / Rejoice in their life; / Among the tall trees / Are light birds on wing: / With strains of their music / The woodlands are rife; / They nest in thick branches / And welcome sweet spring.
6. Lo, there is Thy sea, / Whose bosom below / With creatures doth teem, / Scaled fishes and finned. / Above, the ships laden / With merchandise go, / Nor fear the wild waters, / Nor rage of rude wind.
7. O God, Thou art great! / No greatness I see, / Except Thee alone, / Thy praise to record. / On all Thy works musing / My pleasure shall be; / My joy shall be singing: / My soul, praise the Lord!

21-416「神の民は」**Aan wat op aarde leeft**

1. Aan wat op aarde leeft, geeft Gij hetzelfde brood. / En wie er U om smeekt, wordt met uw Geest gedoopt. / Geef ons dezelfde taal om uw Woord te verstaan. / Bewaar ons in uw hand, bewaar ons in uw Naam.
2. Wie in uw Vlees gelooft, geeft Gij uw eeuwig Woord. / Omdat Gij zijt gedood, bestaan wij altijd voort. / Leid al wie leven wil uw woning tegemoet / omwille van uw dood, omwille van uw bloed.
3. O Geest, die levend maakt en voegt het al aaneen. / Wij zijn verstrooid geraakt, maar Gij houdt ons bijeen. / Weersta toch aan de macht die onze harten scheidt, / o alvermogenend woord, o licht van eeuwigheid.

21-400「たとえ塔はくずれ」**Kirken den er et gammelt Hus**

1. Kirken den er et gammelt hus, / Står, om end tårnene falde; / Tårne fuldmange sank i grus, / Klokker end kime og kalde, / Kalde på gammelt og på ung, / Mest dog på sjælen træet og tung, / Syg for den evige hvile.
2. Himlenes Gud vist ej bebor / Huse, som hænder mon bygge, / Arkepalunet var på jord / Kun af hans tempel en skygge; / Dog sig en bolig underfuld / Bygged han selv af støv og muld, / Rejste af gruset i nåde.
3. Vi er Guds hus og kirke nu, / Bygget af levende stene, / Som under kors med ærlig hu / Troen og dåben forene; / Var vi på jord ej mer end to, / Bygge dog ville han og bo / Hos os i hele sin vælde.
4. Samles vi kan da med vor drøt / Selv i den laveste hytte, / Finde med Peder: her er godt! / Tog ej al verden i bytte; / Nær som sit ord i allen stund / Er han vort hjerte og vor mund, / Drot over tiden og rummet.
5. Husene dog med kirkenavn, / Bygte til Frelserens ære, / Hvor han de små tog tit i favn, / Er os som hjemmet så kære; / Dejlige ting i dem er sagt, / Sluttet har der med os sin pagt / Han, som os Himmerig skænker.
6. Fonten os minder om vor dåb, / Altret om nadverens nåde, / Alt med Guds ord om tro og håb / Og om Guds kærligheds gåde, / Huset om ham, hvis ord består, / Kristus, i dag alt som i går, / Evig Guds Søn, vor genløser.
7. Give da Gud, at hvor vi bo, / Altid, når klokkerne ringe, / Folket forsamles i Jesu tro / Der, hvor det plejdet at klinge; / Verden vel ej, men I mig ser, / Alt hvad jeg siger, se, det sker, / Fred være med Eder alle!